



OKAYAMA UNIVERSITY
岡山大学広報誌

No.60
2011.2
icho namiki

いちよなみき

特集

明日を拓く

～学生たちの研究から

●岡大 TOPICS!
ノーベル化学賞受賞
根岸英一博士と岡山大学
～深まる絆

●岡山大学の人々
梶谷 信之 教育学研究科教授
ロス五輪体操の銀メダリスト

●連載：岡大発ベンチャーな人⑫
東川 篤哉 さん 作家

●学生紹介
羽田 佑 医学部医学科4年生 (OSAL 代表)



明日を

特集

拓

11学部、7大学院を誇る岡山大学では、
約1万4千人もの学生が学び、
研究に打ち込んでいる。
次代を担う学生たちの研究の中から、
学会賞などを受けた優れた業績や
ユニークな成果を紹介する。



~学生たちの
研究から

く

不安のメカニズムに迫る

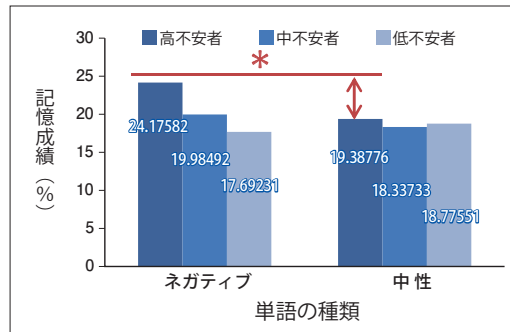
う え だ
あ や か
上田 紋佳 さん

兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科学校教育実践学専攻
岡山大学教育学研究科配属 博士課程3年



だれもが抱える一方、日常生活に支障を来したり、精神障害の主症状になることもある「不安」。この不安が発生するメカニズムを解き明かす研究に打ち込んでいます。独自の実験課題を作成し、無自覚な潜在記憶と不安の関係を調査。これまでに不安を強く感じる人は、つらい経験や不愉快な事象、否定的な状況の潜在記憶が強い傾向があることを明らかにした。

朗らかな笑顔を絶やさないが、実は自身が心配性。中学生の時に友人が不登校になったり、社会で陰惨な犯罪が相次いだこともあり、心の問題、とくに不安に興味を持った。本学へは臨床心理士を目指して進学。しかし、児童相談所での実習で「心の問題の原因を追求し、現場で苦しむ人々を助けて欲しい」という声を聞き、基礎研究に転向した。講義は休まず、研究には熱心に取り組む。学部卒業時には最優秀者に贈られる黒正賞に輝いている。



▲不安傾向が高い人は、中性的な単語よりもネガティブな単語を思い出しやすいことを示した実験データ

不安障害(不安に関する精神疾患)や、うつ病、統合失調症といった精神障害や、不安や抑うつなどの症状に対して、基礎や臨床など心理学の代表的な分野を融合したアプローチで迫る研究は「非常に多様な知識が求められる、国内ではまだ珍しく、注目度も高い」という。今後は、やる気と心の不調の関係や、トレーニングで不安が解消されるかどうかの実践研究も行う予定。治療に役立つ基礎研究に挑み続ける。

地域活性化とイベントの関係考察

ふ じ は ら
が く
藤原 岳 さん

文学部
人文学科行動科学専修コース4年



日本では年4万件もイベントが開かれ、多くが地域活性化を目的とする。しかし、過疎の島・犬島(岡山市東区犬島)で行われているアートプロジェクト「犬島時間」は「アートを手段にした島との関係性構築がコンセプトで、地域活性化のイベントではない」(代表者)のに7年も続いている。過疎地で育ち、イベントと活性化の関係に興味があったため、犬島時間をテーマに卒業論文を制作した。

犬島時間は、夏の作品展示が中心だが、作家やスタッフは、作品を展示する空き屋を貸してもらったり、草刈りや古民家整備などで一年中、島とかかわる。このためスタッフとして昨夏計3週間、犬島に滞在。お年寄りの多い島の人たちでは



▲犬島時間の展示作品に親しむ犬島の人たち

大変な草刈りに汗を流し、作家や島の人と酒を酌み交わす中から「島の人に個人として認められていく」過程を体験。「島の人たちは親しくなった作家やスタッフが気になり、アートの興味がなくてもイベントに来る」と知る。

そして「犬島時間は島にあるそのままの交流を大切にするため、活性化を目的に地域に働きかける必要がない。だからこそ、島とうまく付き合い、継続できている」と分析。「働きかけないことを含め、地域に住む人たちが求めるモノや影響を与えるイベントが今後求められている」と結論付けた。卒業後は地元テレビ局に就職。犬島に飛び込んだ経験を通じて、過疎に悩む地域と向き合っていく。

自然科学研究科先端基礎科学専攻
博士後期課程2年

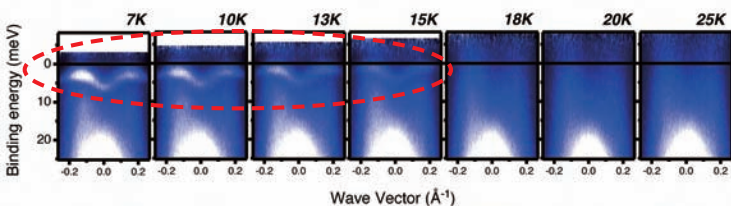
よしだ りきや
吉田 力矢さん



四半世紀の謎・隠れた秩序相転移を捕捉

学生研究紹介 3

水が水になったり、ある温度で電気抵抗がゼロになる超伝導など、物質の急激な変化を相転移という。超伝導物質・ウラン化合物 (UR₂Si₂) では、零下255.5度付近で相転移が起きていることが比熱の変化から分かっていたが、正体は四半世紀近く謎のまま「隠れた秩序」とされてきた。この転移温度付近の電子状態の変化を、東京大学物性研究所のレーザー光を使った装置で、世界で初めて実験的に捕捉。業績は米有力誌に注目論文として掲載され、超伝導物質研究の国際会議では若手ポスター賞を受けた。



▲隠れた秩序相転移を世界で初めて実験的に捉えたデータ (左四つのデータ上部の波状部分)

電子状態の変化は「ある方向に動く電子の周期が変わったため」と予想。ヘリウムなど数種類の希ガスが使える本学の光子分光装置で確認を進める。この相転移は、高温超伝導の前触れ状態と似ており、「正体を突き止めれば、本学で盛んな銅酸化物高温超伝導体の研究にも寄与できる」という。

研究者を目指し、高校卒業後すぐに米の大学へ進学。地球温暖化をテーマにしていたが、分光法を用いた研究に興味を持ち、大学院から本学へ。「指導教員以外の先生方とも距離が近く、刺激を受けながら研究できる環境」と絶賛する。送電線や電磁石、温度スイッチなど活用が見込める相転移現象の研究は「地球温暖化と同様、社会的意義が大きい。形状記憶合金の相転移などまだまだ残る謎を解明したい」と意欲は尽きない。

保健学研究科保健学専攻
博士前期課程1年

ひょうだ ともこ
兵田 朋子さん

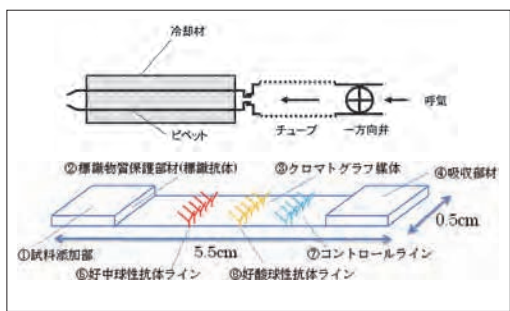


ぜんそく重症度の簡易検査キット考案

学生研究紹介 4

ぜんそく重症度を手軽に判定でき、患者の負担が少ない検査法を考案。中国地方の学生らの創造性豊かなビジネスアイデアを表彰する「第9回キャンパスベンチャーグランプリ中国」(中国経済連合会などで行く同グランプリ中国実行委員会主催)のテクノロジ部門で最優秀賞に輝いた。今年3月、全国8エリアの代表が集まる全国大会に出場する。

現状では、病院で血液や呼吸機能を調べるなど患者の負担が大きい検査法しかないことから、インフルエンザや妊娠の検査キットのような簡易検査用キットを発想した。ぜんそくの重症度の目安となる好中球や好酸球に反応する検査液を塗ったプレートに、呼吸凝縮液を垂らして反



▲考案した呼吸凝縮液を採集するキット(上)と重症度を判定するキット

応の有無で判断する簡易検査キットと、呼吸凝縮液収集キットをアイデア化。審査では、免疫反応を利用した発想と、安価で市場性が期待できる点が評価された。

臨床検査技師の免許を取得し、保健学科を卒業。「就職前にじっくり研究し、実験手法などに習熟したい」と大学院に進学。指導教員の片岡幹男教授の研究テーマを発展させ、グランプリに応募した。「純粋にうれしい。研究に前向きになれます」と受賞を喜ぶが、「まだまだ机上の案。結果が色調の違いとして出るので、反応液の適切な濃度などクリアすべき課題は多い」と表情を引き締める。修了までにキットを完成させるため、細胞培養や染色に格闘する日々が続く。

学生研究紹介 5

社会性昆虫の不思議に挑む

環境学研究所昆虫生態学研究室
博士前期課程1年
やまもと
山本 結花さん



▲研究対象のヤマトシロアリ

アリや蜂など、なんらかの作用や遺伝で働いたり、巣を守ったりと劇的に役割を変え、複雑なルールの下で生活する社会性昆虫。この分野で世界的な成果を上げている研究室で、シロアリの研究に取り組む。

卒業論文で、巣を作った女王が死んだり、卵の生産が間に合わなくなると、子の中から成長して卵を産む二次女王が、単為生殖の子である理由を解明するため、遺伝的な特徴を調査。有性生殖の子に比べ、二次女王になりやすい遺伝子の組み合わせを持つていることを示した。

さらに、女王が二次女王の成長を制御しているフェロモンの成



▲シロアリ採集のため山に分け入る

ンバーが、どのよう役割を分担し、調和を保っているのかも探りたい。飼育するシロアリを見る目は優しい。

分を世界で初めて特定。これらの業績を複数の学会で発表し、優秀ポスター賞を受けた。

大学院進学後は、女王フェロモンが、巣の中の卵の量を適当に保つために使われている可能性を明らかにし、日本動物行動学会の最優秀ポスター賞に。「産卵制御に女王フェロモンが関わっていることを明らかにした点で、新規性があると評価された」と説明。相次ぐポスター賞受賞には「学会とはいえ、シロアリの専門家ばかりではない。専門用語をなるべく使わないなど表現や説明のわかりやすさに気をつけ、絵を多用して目を引く工夫をしている」という。

今後は、女王フェロモンと産卵量についてさらに調べるほか「コロニーで暮らす他のたくさんのメンバーが、どのように役割を分担し、調和を保っているのかも探りたい。飼育するシロアリを見る目は優しい。」



学生研究紹介 6

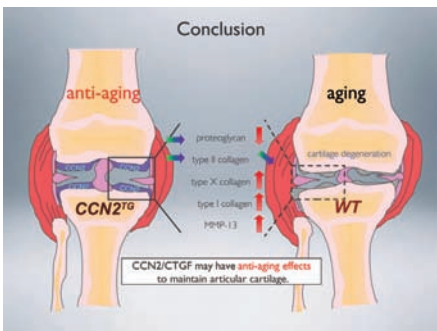
関節の若さ保つたんぱく質

医歯薬学総合研究科機能再生・再建科学専攻
歯科矯正学分野博士課程4年
いとう
伊藤 慎将さん

加齢や物理的的刺激により関節軟骨がすり減ることなどで起きる変形性関節症は、高齢者に多い一般的な病気だが薬がない。軟骨から骨への成長を促し、軟骨細胞のクッションや足場となる基質を増やすたんぱく質が、関節軟骨を若々しく健康な状態に保つのに有効だと示し、この病気の仕組みの解明や治療薬開発のヒントになる成果をあげた。整形外科や軟骨、アンチエイジング分野の注目は高く、国内外の学会賞や全国の大学歯学部優秀院生に選ばれた。

臨床の専門は矯正歯科だが、大学院1年生で、軟骨研究で世界的に有名な滝川正春教授の研究室へ。このたんぱく質を、遺伝子操作で軟骨組織にだけ過剰発現させたマウスと、遺伝子操作していない兄弟マウスの関

節の状態を比較、解析。遺伝子操作したマウスの方が、高齢でもこのたんぱく質が多く残り、関節状態は良好。基質の量も多く、変形性関節症の主因である基質分解酵素は少ないことを示した。また、軟骨を元に骨ができる際に出る物質は、遺伝子操作をしていないマウスで多く、一生骨に変化してはいけな



▲若々しく健康な状態に保たれた遺伝子操作マウスの関節(左)と通常のマウスの関節

や物理的的刺激で骨に変わろうとして病気が起きるとい説を裏付けた。「これまでの研究の蓄積があり、たまたま結果が出るタイミングでパ

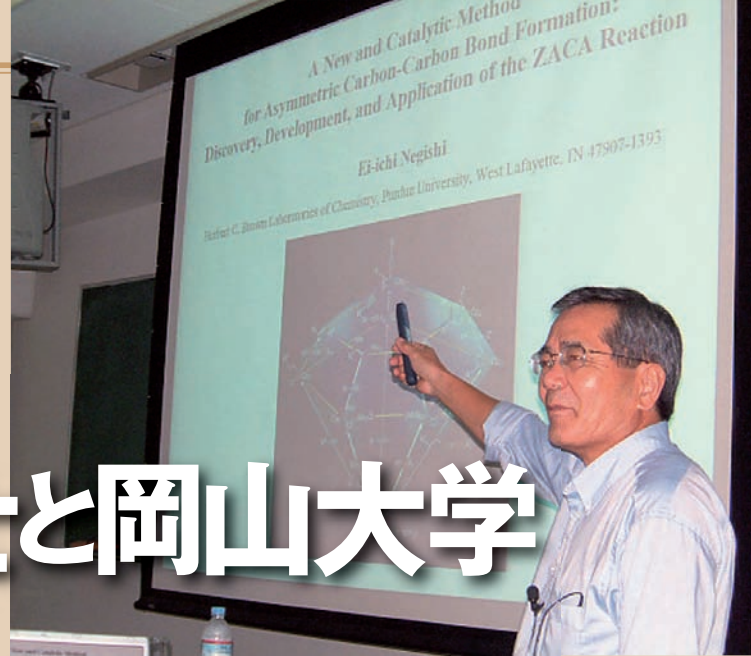
「これまでの研究の蓄積があり、たまたま結果が出るタイミングでパ

と研究で多忙な日々だが「互いに気分転換になつており、今後も両方続けたい。今度は自分が研究を引っ張り、次へ渡したいですね」と意気込む。



TOPICS!
岡大

ノーベル化学賞受賞 根岸英一博士と岡山大学 ～深まる絆



▲学生たちに講演する根岸博士（2005年7月）

2010年10月、製薬や電子産業など幅広い分野で使われる有機化合物の革新的合成手法「クロスカップリング反応」の開発で、ノーベル化学賞を受賞し、日本中を沸かせた米・パデュー大の根岸英一特別教授。本学は、半世紀近く米国で活躍する根岸博士が2005年から計4回訪れて講演を行っている、国内でも縁が深い大学です。

この講演は、学生時代から根岸博士と交流があり、2004年に着任した自然科学研究科の西原康師教授が「学生に本物の化学を学ばせたい」と依頼し実現しました。学会や企業の講演などで帰国する際に立ち寄ってもらい、最近の研究内容や気になっている化学の話題を話していたでています。西原先生によれば「岡山には根岸先生が米・シラキュース大にいた時の友人も多くおられ、『今度日本に行くけど、岡山にも行くかどうか?』と連絡をくださるほど、気に掛けてくださっている。根岸先生の講義を受けた学生はみんな先生を身近に感じており、受賞とともに喜んでいきます」とのことです。

こうした縁で、根岸博士は、本学が重点的に推進する、超伝導や有機半導体などを研究するプロジェクト

「エネルギー環境新素材拠点」の外
部評価委員に受賞前から内定して
いました。プロジェクトの目指すべき
方向性を、世界的視野からアドバイ
スしてもらう予定です。

この新素材拠点の会議に合わせ、
根岸博士が3月、受賞後初めて本学
に來られます。23日には、「夢を持
ち続けよう!」と題して特別講演会
を開催。世界的科学者の話を広く地
域の皆様にも聞いていただき、岡山の
科学界にも大きな刺激になると思わ
れます。

また、ノーベル化学賞や文化勲章
など数多くの受賞にいたった素晴ら
しい業績や、本学の教育研究への寄
与に敬意を表し、本学初の「名誉博



▲備前市を訪れ、備前焼作りを体験する根岸博士夫妻（2005年7月）

士」を授与することも決まりました。
ノーベル賞受賞後、根岸博士は「科
学技術発展への使命感を強くしてお
られ、中高生に化学の面白さを伝え
る活動や、人工光合成など二酸化炭
素を有効な炭素源と考えて活用する
研究に力を入れておられます」と西
原教授。今後毎年1回の来学を約束
してくださっているそうで、学生や
研究者と一層の交流を深めていただ
き、本学の教育研究がさらに発展す
ることを確信しています。



▲学生たちとの記念写真に収まる根岸博士（2010年6月）

1984（昭和59）年夏、ロサンゼルスオリンピック（ロス五輪）。柔道の山下泰裕選手らの活躍に日本中が興奮しました。このロス五輪体操の銀メダリストが、今回ご紹介する教育学研究科教授の梶谷信之先生です。

梶谷 信之（かじたに のぶゆき）
1955（昭和30）年 宮崎県出身
1978（昭和53）年 日本体育大学体育学部卒業
紀陽銀行、奈良県立医科大学を経て1988（昭和63）年から本学勤務

宮 崎県生まれ。兄が体操競技をしており、その影響で自然に始めていました。技に成功するとうれしくて、難しい技にどんどん挑戦するうちに、のめり込み、中学生のころには九州大会で準優勝するまでになりました。その後、体操の名門・大阪清風高校を経て日本体育大学に進学。4年生のときには体操部のキャプテンとして300名を超える部員を率いました。卒業後も銀行に勤めながら、世界選手権に出場するなど活躍し、80年にはモスクワオリンピックの日本代表選手に選ばれました。ところが、ソ連のアフガン侵攻に抗議し、日本を含む西側諸国の多くが出場をボイコット。無念の涙を吞みま

した。非常にがっかりされたそうです

が、すぐに立ち直り、翌年の世界選手権などで着実に実績を重ね、84年のロス五輪代表の切符をつかみました。

日 本代表体操選手団のキャプテンは最年長の梶谷先生。心がけていたのは「みんなの意見を二つにする」と。選手団には森末慎二選手、具志堅幸司選手（ともにロス五輪金メダリスト）ら一流のアスリートがおり「オリンピック選手になるくらいだから、みんな『自分の意見が一番』。そんな彼らを団体戦優勝という目標に向けてまとめあげ、チームワークを発揮させるのにたいへん苦心しました」。そして、みごとに銅メダルを獲得。

個人戦では平行棒に出場。順調に勝ち進み、決勝に進出しました。日本はおろか世界中が注目する大舞台。「フィニッシュで平行棒から手を離して、床に着地するまでの約0.2秒間が1分間にも感じられた」そうです。結果は10点満点で銀メダル。同じく10点を獲

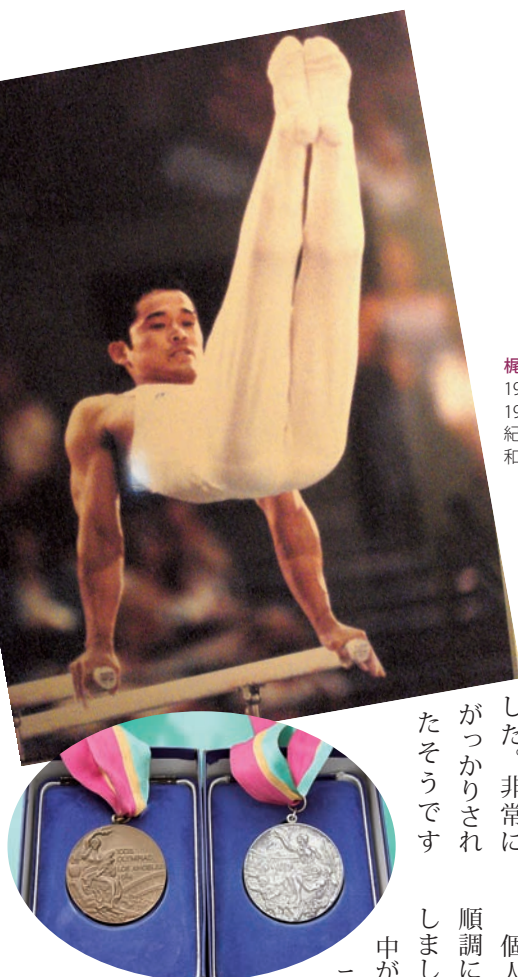
得したアメリカのバート・コナー選手より予選での得点がわずかに下回ったため、惜しくも金メダルは逃してしまいました。「10点満点をい

ただいたので、自分では納得しました。正直、金メダルは欲しかったですけどね」

口 ス五輪出場前に、体操の指導者を志し、銀行を退職。奈良県立医科大学などを経て、88年、本学に採用されました。現在は教育学研究科教授として幼児体育などについて講義するほか、夏休みには小学生向けの体操教室も開いています。子どもの頃に体の動かし方を覚えて、スポーツするときの基礎にして欲しい。体を動かすのは怖くないことを知って、運動を楽しんで欲しい、という願いを込めています。

2008年から「競技力を高める」と題した公開講座を開始。岡大生だけでなく、地

域の方々にも効果的に成果をあげるトレーニング方法を講義しています。「オリンピックの話が聞け、実際のメダルも見られる」と好評のこの講座、来年度も開講予定です。みなさんもメダリストの講義を聞きに来られてはいかがでしょう。



なにもしなかった学生時代

生まれは尾道なのですが、父親が転勤族だったので、西日本各地を転々となりました。高校は鹿児島で、父親の実家は熊本だったのですが、全然知らない土地に行きたくて、岡大に入りました。

学生時代はサークルもアルバイトもせず、のんびりと毎日を過ごしていました。自分でも「なにやってたんだろ」と不思議に思うくらいです（笑）。ただ、映画だけはたくさん見ました。千日前商店街の映画館や、できたばかりの岡山メルパに通って、年間数十本は見ていたと思います。とくに『ピンク・パンサー』シリーズのブレイク・エドワーズ監督の映画や『ブルース・ブラザーズ』などハリウッド製のバカ・コメディが好きでした。私の作品にはユーモアがあると言われるのですが、この時の影響があるのかもしれない。

デビューまでアルバイト生活

卒業後、東京のガラスビンメーカーに勤めましたが、入社当初から辞めたかったので（笑）、4年で退社。高校時代に推理小説をよく読んでいたので、光文社の『本格推理』という文庫シリーズの推理小説コンテストに作品を投稿してみたら採用されて、「これは作家としてやっていけるんじゃないか」と考えて、専業作家を目指しました。それが94年、26歳の時でした。8年間、アルバイトをしながら執筆を続け、2002年に光文社の新人発掘プロジェクトでデビューできました。

四六時中ネタ探し

私の小説はトリックを中心に据えた構成になっています。ストーリーを組み立てると

岡大異ベンチャーな人紹介

東川 篤哉 さん

作家

お嬢様刑事と毒舌執事がユーモアあふれる掛けあいで事件の真相に迫る推理小説『謎解きはディナーのあとで』（小学館）。60万部を超えるベストセラーとなり、各所で話題沸騰中の作者・東川篤哉さんに創作の秘密について語っていただきました。



▶東川 篤哉（ひがしがわ とくや）
1968（昭和43）年 広島県尾道市生まれ
1990（平成2）年 岡山大学法学部卒業
会社勤務を経て、2002（平成14）年、カッパノベルズ『密室の鍵貸します』で作家デビュー。著書に岡山を舞台にした『館島』（創元推理文庫）など。

『謎解きはディナーのあとで』
小学館より発売中

きは、まずトリックから考え、それにぴったりのあしこぎエピソードをつくるようにしています。だから、四六時中トリックのことを考えているというも良いです。トリックは新聞を読んだり、テレビを見たり、街を歩いたりしているときに、なにかの拍子で、なにかを見て考えつくことが多いですね。考えたアイデアはメモに残しています。今まではそのストックを使って創作してきましたが、『謎解きは〜』のヒットのおかげで仕事の依頼が増えているので、だんだん苦しくなってきました（笑）

が苦しいですね。作家としていちばん苦労するところですよ。書き終わったあと、本が書店の店頭で並んでいるのを見ると作家としての喜びを感じますね。とくに『謎解きは〜』は書店員さんからの反響もたくさんあって、うれしかったですね。

退屈させない作品づくり

作品を書く際には、とにかくわかりやすく、そして退屈させないことを心がけています。推理小説はどうしても途中で面倒な説明が多くなり、退屈になってしまうがちです。私の小説ではユーモアをいわばストーリーのエンジンとして取り入れ、読者を楽しませ、飽きさせないようにしています。『謎解きは〜』のヒットは、私の小説の世界観に主役二人の

キャラがびったりはまっているからだという評価を耳にします。それから、今回は女性読者向けに「おしやれ」という要素も取り入れてみました。うまくいっているかどうかはわかりませんが、それが女性読者に受けている理由かもしれません。

多くの読者に楽しんでもらえたら

2月に新刊『放課後はミステリー』とともに『（実業之日本社）』が出ました。『謎解きは〜』の続編も執筆中です。「ヒット作を出す」という作家になるときの目標は達成したのですが、これからもたくさん小説を世に出して、一人でも多くの方に楽しんでもらえれば、と願っています。

羽田 佑

ハダ タスク



今回は救命処置を学び、地域の方向けの教室を開くなどの活動を行っているサークルOkayama Save A Life (通称: OSAL) の代表、医学部医学科4年生の羽田佑さんに救命救急活動にかける思いを聞きました。

少しでも多くの人の命を救うために

救命サークルOSALは平成一七年から有志で活動していましたが、正式なサークルとして認められたのは二年前からです。あくまでもボランティア活動なのですべてのイベントに全員が集まるわけではありませんが、部員数は30名以上。鹿田キャンパスの医学部医学科と保健学科、歯

学部他にも、津島キャンパスから薬学部の学生も参加しています。

救命活動には医療従事者が行うALS (Advance Life Support) と心臓マッサージなど一般の方でもできるBLS (Basic Life Support) の二種類があります。OSALの活動は、以前はALSの勉強会がメインでしたが、数年前からはBLSの講習も積極的にを行っています。

少しでも多くの人の命を救う

ためには、もちろんALSの技術を磨くことが必要です。でも、「病院に来たら助けるけど、それまでは知らない」ではいけませんよね。病院に来るまでの時間をつなぐためにはBLSの普及も大切。どちらもおそろかにならなければいけないと思います。

ゼロでなければやる価値がある

最近では地域の方向けにBLSの一つとしてAED (自動体外式除細動器、救命処置に使われる装置) の使用法を講習することが多いです。AEDは一般の人でも使えるのが大きなポイントです。保健の授業などのおかげで若い人には普及してきましたが、まだAEDの使い方、心臓マッサージの方法が分からないという世代は多い。

ALSの勉強会でもそのことを知ったのが、OSALに入ったときからあります。心肺停止の際、処置をするまでの時間で蘇生率は大きく変



わるので、そばにいた人がすぐに処置することが大切です。そんな場面に遭遇したとき、BLSの経験があれば、何をすればいいのかわかって、動けるようになります。講習は何かあった時に動き、近づく勇氣を持てるようにするための活動でもあるのです。AEDの講習を受けた人がそういう場面に遭う可能性は低いかもしれないけど、ゼロではない。助けられる命が一人でも増えるなら、やる価値はじゅうぶんにあります。

今は、老人ホームのスタッフの方向けの講習や、商店街でブースを設けてBLSの普及活動をしています。一番大規模なものでは、広島大学と協力して広島

球場でカープの試合前イベントとして

BLSの普及活動をさせていたいただきました。まだオファーが少なく、不定期にしか活動できないのがつらいところです。

患者さんの立場に立てる 医者になりたい

一人でも多くの人を救えるように、救急患者が来ても専門じゃないから無理、と断るのではなく、オールマイティになんでもこなし、同じ目線で患者さんの声を聞き、相手の立場に立った医療を施せる医者になるのが目標です。BLS講習は一般の方と触れあい、相手のことを理解する訓練になるという点でもためになっています。

現在4年生ですが、来年度の夏休み明けまでは活動を続ける予定です。来年度、全国から学生を集め、二日間かけてBLSなどを学ぶワークショップを開くのが私のOSALでの活動の集大成になります。

これからもBLS講習で蘇生の輪を広げ、非常時に皆が無視するのではなく、皆が駆け寄る社会にしていければと思います。

難治性感染症治療薬の創製に向け 中国上海中医薬大学・韓国圓光大学と 共同研究協定

(2010.12.13)

中国上海中医薬大学、韓国圓光大学と難治性感染症（マラリア等の熱帯病、C型肝炎など）の治療



▲圓光大・金学権副学長(右)、上海中医薬大・謝建群副学長(中)と本学・曾良達生副学長(左)

薬開発へ向けた共同研究協定を締結しました。
豊富な天然資源を保有する上海中医薬大、人獣共通感染症の研究が活発な圓光大、マラリア新薬開発研究を通じ、シーズ発掘から臨床試験に至るすべての医薬品開発のシステムを持つ本学がそれぞれの強みを生かし、新薬の創製を目指します。知的財産面での取り決めも明文化しており、日中韓の3大学が研究成果に関する共通のルールを定めるのは極めて画期的です。

フランス・ストラスブール大学と 大学間交流協定を締結

(2011.1.21)

フランスのストラスブール大学と大学間交流協定を締結しました。昨年7月に同大政治学院と社会文化科学研究科が部局間で結んだ交流協定を全学に拡大したものです。この協定により全学部・研究科で同大との学術交流・学生交流が可能となりました。
ストラスブール大学で行われた調印式には、同大のアラン・ベレッツ学長、アンヌ・クレーブIIペリシエ副学長、本学の佐藤豊信副学長、荒木勝社会文化科学研究科長ら関係者が出席。ベレッツ学長と佐藤副学長が協定書を交わしました。



▲右から許南浩医学部長、荒木研究科長、佐藤副学長、ベレッツ学長、ペリシエ副学長、清水耕一経済学部長

既に社会文化科学研究科とストラスブール大学政治学院との間で実施している教員の派遣に加え、今後は自然科学研究科、医歯薬学総合研究科でも教員・学生の交流を行う予定です。

駐日セルビア大使が 本学を訪問

(2010.12.10)

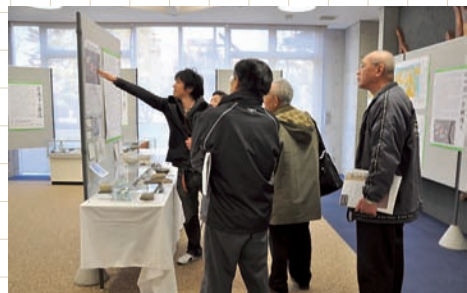


駐日セルビア大使（右から4番目）とアレクサンドラ・コヴァッチ書記官（左から3番目）を囲んで
会談では、ムルキッチ大使と千葉学長の間で現行の部局間協定を大学間協定に発展させ、学生交流・研究交流を充実させることなどが話し合われました。

駐日セルビア共和国大使館のイヴァン・ムルキッチ特命全権大使とアレクサンドラ・コヴァッチ文化広報・領事担当書記官が本学を訪れ、千葉喬三学長らと会談しました。
本学は、同国ノヴィサド大学と大学間交流協定、ベオグラード大学哲学部と本学文学部とで部局間交流協定を締結し、学生の相互派遣・受入を盛んに行っています。また、文学部では全国的にも珍しいセルビア語の授業を開講しています。

「鹿田荘」の謎に迫る 発掘成果展を開催

(2011.1.6-10)



鹿田キャンパス周辺の発掘成果展「謎の荘園鹿田荘―集落・条里・領域―」が創立五十周年記念館で開かれました。
鹿田荘は古代から中世にかけて鹿田キャンパス周辺にあった、全国で四箇所しかない藤原摂関家の代表者が代々受け継いだ荘園の一つとされています。しかし、鹿田荘の範囲など、多くの点は未解明のまま。同展では、関連遺跡の調査研究に携わってきた本学埋蔵文化財調査研究センター、岡山県教育委員会、岡

ベトナムカフェで学生が ベトナム人留学生らと交流

(2010.11.12)



ベトナム人留学生と学生・教職員の交流イベント「ベトナムカフェ」を行いました。
本学は、ベトナムに現地事務所を設け、同国・ダラット大学に教員を派遣するなど同国との交流を重点的に進めており、学生に同国へ関心を高めてもらうため企画。この日は「ベトナム語に挑戦！〜ブシ編〜」と題し、来日中のベトナム現地事務所職員や長期派遣経験がある日本人教員が、同国の情報や文化などを紹介した後、日本人学生がベトナム人留学生からベトナム語を学びました。
カフェは今後も定期的に行う予定。今年3月には同国でのフィールド研修も計画しています。

山市教育委員会の成果をはじめ一堂に集め、鹿田荘の謎に迫りました。
文字を書ける有力者の存在を推測させる硯や土器、陶器といった出土品約200点、平安から鎌倉時代にかけての鹿田荘一帯の変遷が一目で分かる景観復元イラストなどを展示。来場者は出土品を手にとったり、研究者の説明に耳を傾けたりして歴史ロマンに思いを馳せていました。

● 学生が
キャンドルナイトを
開催 (2010.12.21)



照明を消してろうそくに火をともし、ゆったりとした時間を楽しむイベント「Candle Night ~ Heartful Message ~」が津島キャンパスの大学学生会喫茶スペースで開かれました。

本学を盛り上げるため、学生サークル「L☆Lucca」を中心に結成した「学内COEウイ

● 次世代認定マーク「くるみん」を取得

本学は、労働者の仕事と子育ての両立を積極的に支援する「基準適合一般事業主」(子育てサポート企業)に認定され、次世代認定マーク「くるみん」を取得しました。

施設「なかよし園」の保育体制の見直しなどを行いました。現在は第三期一般事業主行動計画(平成22年4月〜平成25年3月)に従い、次世代育成支援室のホームページで、出産や育児に関する制度の周知などに取り組んでいます。



● 大学院生が人命救助で
岡山県善行賞
(2011.1.24)



路上で倒れた男性を救助したことをたたえられ、医歯薬学総合研究科薬科学専攻2年生の杉山菜由さんと矢野春奈さんが「岡山県善行賞」の表彰を受けました。

二人は2010年1月25日昼頃、津島キャンパス周辺で自転車で乗ったまま倒れ込む男性を目撃しました。二人は協力して気道確保や心臓マッサージなど応急処置を施し、男性はその後到着した救急車で病院に搬送され、一命をとりとめました。

● 新「なかよし園」を開所

● オープン



昨年10月から行っていた鹿田キャンパスにある教職員・学生の子ども向け保育施設「なかよし園」の改修工事が終了し、開所式を行いました。

千葉学長、田中宏二企画・総務担当理事、森田潔病院担当理事が挨拶したあと、園児とともに新看板を披露。秋に園児が拾って遊べるように、園庭に全員でドングリが実るマテバシイを記念植樹しました。保育アドバイザーである高橋敏之教育学研究科教授が図鑑などドングリに関連した書籍を同園に贈呈し、「マテバシイは大きなドングリができる。大事に育ててください」と語りかけると、園児は「ハイ」と元氣よく返事をしていました。

「誇りの源」 COLUMN 探訪

キャンパス探訪 05



仕切りのある机で集中したり、丸テーブルを囲んで友人と話し合ったり... 一般教育棟の自学自習スペース「Wakuスクエア」には学生の姿が絶えない。よく利用するという法学部の女子二人は「文系は学部で自習場所が少ないので空きコマや休日の勉強に便利。疲れたら友人と話したり、飲み物を飲んで気分転換もできる。家と違い誘惑がなく、他人の目があるので「はかどりますよ」と満足そう。

岡山大学には現在、こうした自学自習スペースや情報処理・語学演習室といった設備のほか、語学力養成システム、職業観の育成や就職支援といったキャリア開発、国際交流体験など、学生たちを多面的に支援する仕組みが用意されている。しかし、それらは活用されなければ意味はない。

OPEN

『青い鳥』

新潮文庫
著者：重松 清



私は歯学部卒前臨床実習と、大病院の歯科医師卒業後臨床研修の主たる診療室である「総合歯科」で勤務している歯科衛生士です。「総合歯科」で勤務している歯科衛生士です。病院の技術職員ではありませんが、学生さんや研修医の先生方に対して、臨床現場ならではの器具・機械などの管理や歯科治療を受ける患者さんに対する診療の姿勢など、実習や研修の教育現場において教員が行いにくい部分を指導しています。この度は「岡山大学大学院歯学総合研究科教育功労賞」を受賞しました。今後も学生さんや研修医の先生方とともに、学んでいけたらと思います。

お薦めの一冊は、岡山県出身の重松清さんの『青い鳥』です。「青い鳥」と言えば、メーテルリンクを思い浮かべますが、これは、ある中学校の非常勤講師のお話です。

主人公の村内先生は、国語の先生なのに、言葉がつかえてうまく話せません。でも、授業よりもっと大事な仕事があり、先生にはあります。いじめの被害者の生徒、父親の自殺に苦しむ生徒、気持ちを伝えられずに抱え込む生徒、そして家庭を知らずに育った生徒など、生徒一人一人にきちんと向き合い、じっくり話を聞いて、ひとりぼっちの心にそっと寄り添い、本当に大切な事は何かを教える仕事です。村内先生は吃音なので、うまく話せません。でも、その分、大事なことがしっかりと話してくれ、とくに最初のお話とラストのお話では、涙すること必至です。

こんな先生に出会っていたらどんな財産になっていたでしょうか。誰もが胸を打たれ、誰もが共感できる物語だと思います。些少ではありますが、教育に携わる者として考えさせられる場面が多いです。物語の中に渦巻く、後悔、責任、そして希望。そういうものを読み取って欲しい作品だと思います。

重松清さんが書く文章は、飾りが無いのに美しい。さすが直木賞作家ですね。ぜひ、学生さんのみならず、教職員の方々にも、読んでいただきたい本だと思います。

この額は、一九八九(平成元)年から八年間在職していた石川県農業短期大学(現・石川県立大学)のゼミ生から卒業記念として贈られたものです。「仏の……」という額を贈られた上司の「学生はちゃんと見えますね。鬼という言葉に感謝の気持ちがあるから目には涙です」という囁きに、不覚にも鬼の目にも涙でした。

鬼とは大仰ですが、厳しく指導したのは、自分を堕落させないためです。三十五歳で教員となり、「先生」と呼ばれるたびに、勘違いをしかかっている自分に気がついたからです。自分を律するために、身近なところに厳しい監視者を置く、その最善任者が学生です。鬼ならでの厳しい指導をすればするほど、彼ら彼女らの私への視線も厳しくなるのです。「小松！ 自分には甘いぞ！」と。この意図的に創りあげた緊張関係の中で、互いに少しは成長できたようにです。

評論家・西部邁氏はその著『小沢一郎は背広を着たゴロツキである。』(飛鳥新社二〇一〇年)で、指導力は決断力と説得力からなるとしたうえで、「説得力は人格からやってくる。そして人格は、表情や物腰を含めた意味での言葉によって創られる。言葉をほとんど発しない者、発したとしても恐ろしく平板にして平凡であり凡庸にして低俗であるような言



昨年引き続き、鬼の話からで恐縮ですが、「鬼の小松」とパソコンで打たれた写真の額が研究室に飾られ、私を見守って、いやそっちはなく、厳しく監視してくれています。

葉、そんなものしか持ち合わせていない者の人格は高が知れている。」と喝破し、正論を射抜いています。

スタンフォード大学ロバート・サットン教授は、『部下を守る「盾」となれぬか(The Boss as Human Shield)』(ハーバード・ビジネス・レビュー二〇一一年二月号)という論考で、説得力無き指示から部下を守る手段として、「創造的無能」(重要ではない用事を押しつけられ、しかも無視できない場合)、さっさと片づけて、より重要な課題へと進むことと、「悪意に満ちた恭順」(愚かな命令に逐一従い、その仕事を失敗に終わらせること)という、面従腹背をすすめています。

不毛で、非生産的で、悲しみさえ覚えるすすめに、心からの賛意を表す気にはなりません。自分自身の来し方を思い起こす時、このような行動でやり過ぎしてきたことも少なくありません。無能な上司の上意下達(トピダウン)は罪作りなものです。

学生たちに、このような行動を選択させないために、制度にのみ裏付けられた立場を踏覚することなく、自律かつ自立を旨として生きて行きたいものですが、色あせた額が重みを増し、おろすにおろせなくなっております。困ったことに。

(編集委員長 小松 泰信)

より良い広報誌を作成するために、みなさまからのご意見・ご要望をお待ちしております。取り上げてほしい話題、質問したいことなど、何でも結構ですので、右記連絡先までお寄せください。

岡山大学広報誌



第60号
2011.2

発行/岡山大学学長戦略室

〒700-8530 岡山市北区津島中1-1-1
TEL. (086) 251-7292 FAX. (086) 251-7294
E-mail. www-adm@adm.okayama-u.ac.jp

<http://www.okayama-u.ac.jp>

